

開業医時代を振り返って

帯広市医師会

大野 克幸

私は、昨年4月でほぼ内科診療を卒業しました。今回、投稿のご依頼があり、開業医時代のことを中心に、とりとめのないことを書かせてもらうことにしました。

私は10年間勤務した地元の総合病院を退職して、当時、地域で不足していた血液透析と内科外来を中心としたクリニックを平成3年に開院しました。

当初より、透析施設を持つということで、医院の将来継続を考えており、平成7年に医療法人に移行しました。その際に医院の土地・建物を個人から法人に売却し、法人所有とすることにしましたが、同一人物による売買のため、裁判所の許可が必要で、初めて裁判所に司法書士さんと行きました。ところが、2人一緒ではなく、最初に私だけが部屋に呼ばれ、若い裁判官からいろいろ質問されましたが、私には分野外のことで、イエスと言ったらいいか、ノーと言ったらいいか分からず、この時ほど人生の中で返事に窮したことはありませんでした。その後、司法書士さんが呼ばれ、適切に対処していただき、無事、当日の夜に裁判所より許可の返事を頂きました。長い開業医生活で思い出に残る出来事でした。

その後、平成27年に大学医局の後輩に医院を継承してもらうことができました。この時は、地元のM&Aの得意な会計事務所に手続きすべてをお任せし（行政、銀行の対応、書類作成等）、私は船に乗っているだけでした。また、この継承の件が地元新聞に「他人同士の医院継承は珍しい」とのことで記事に取り上げてもらい、感謝しています。

新院長のご協力、ご配慮のおかげで、患者さんの引き継ぎも問題なく、特に透析患者さんと職員の脱落が1人もなく、順調に経過したことが大変良かったと思っています。現在、医院の継承が懸案の方に、何か参考になれば幸いです。

実は、56歳の時に体調を崩し、入院と闘病生活を余儀なくされました。この間、6ヵ月仕事ができず、大学からドクターを派遣していただき、難局を乗り切ることができ、関係諸氏には感謝に堪えません。おかげさまで、主治医と医療の進歩によるおかげで、治すことができました。

入院時、患者の立場となり、主治医のちょっとした一言が気になるなど、患者さんの気持ちが少し分かったような気がしました。その後は、患者さんの気持ちを察して診察を心掛けたつもりです。

今のドクターはわれわれの時代と異なり、医師としての知識・技量が必要で、それにより患者さんの予後が左右される時代になり、多くの勉強が必要で、大変と思いますが、頑張っしてほしいです。

私には特にこれといった趣味がなく、一応、将棋・囲碁・麻雀・スキー・卓球と最低レベルでやりますが、のめり込む性格ではありません。以前は囲碁・麻雀などはかなり戦闘的で、自分のことしか考えず、囲碁は常に相手の大石を取ろうとし、返り討ちにあったりしていました。しかし、病後は独りよがりにならず、囲碁は半目勝てば良い、麻雀は4回に1回上がれば良いと思うようになりました。60歳にしてようやく大人になれたような気がします。これも大病のおかげでしょうか？

現在は、医院の仕事も遠ざかり、たっぷり時間のあふる生活を過ごしています。

これから、孫の時代は異常気象・原子力・核兵器・AI・貧富の格差等々、さまざまな問題が気に掛かるころです。私なりに、少し楽な立場で社会に貢献できる仕事か、ボランティア的なことをしていけたらと考えているところです。

一貫性のない駄文でしたが、ご容赦ください。

北海道医報「会員のひろば」投稿募集

◇情報広報部◇

北海道医報では、「会員のひろば」への投稿を募集しています。記事の内容は自由です。医療情勢、診療で日頃から感じること、趣味・紀行、エッセイ、自己紹介等でも可です。

1. 記事制限：1記事あたり1ページ以内。
2. 文字数：600～1,000字（1段分）または1,600～2,000字程度（2段1ページ分）
※いずれも写真・図含まず。
3. 掲載：掲載可否および掲載号は広報委員会にて決定します。
4. 原稿送付先：ihou@m.douji.jp
5. 問い合わせ先：011-231-7661（情報広報部）